「日々の理科」（第 2138 号） 2020,-5,17

「巣の乗っ取り （３）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

「壁の穴」に最初にやってきたのは「ヤマガラ」だった。ヤマガラは「山雀」の意味で、文字通り山に住んでいる。都会地ではまず見かけないので、初めて見た人は「オレンジ色の鳥」としか見えないだろう。

ヤマガラは比較的人間を恐れない野鳥だ。バード・テーブル（餌台）を設置すると、一番最初に来るのはヤマガラだし、その後もやってくる頻度は一番高い。手のひらにヒマワリの種を載せて、じっと待っていると、人の手に乗ることもある。かつては、「山雀のおみくじひき」という見世物があったが、今は見られなくなった。

次に来たのは「スズメ」だった。このあたりは標高が 1100M あるので、スズメよりもヤマガラのほうがずっと多い。先客のヤマガラに気づいたようで、すぐに去っていった。スズメはヤマガラやシジュウカラとはちがい、ハタオリドリに近い仲間の野鳥だ。本来は「壺型」の巣を造る習性がある。こうした穴の中や、屋根の隙間でも、内部には壺型の巣を造ろうとする。

次にシジュウカラが現れた。シジュウカラも「四十雀」と「雀」の字があるが、スズメ科ではなくシジュウカラ科に属する。人工的な巣箱も利用する、樹洞性営巣鳥類の一種だ。

最初は恐る恐る、中を見ていたが、ついに意を決して入り、ついに中で営巣中のヤマガラを追い出して乗っ取ってしまった。ほとんど「強盗」である。

中にはもうヤマガラが造った巣ができあがっていたのだろう。あっという間に、オスとメスが「愛の巣」にしてしまった。野生動物は実にしたたかである。